



### 三 大王、うどん竜と戦う

---

「そうだな、何から話をしようか。そうだ、うどんとの戦いだ。あれは壮絶だったなあ。まさか、竜に変身するとは思わなかった」大王は目をつぶり、腕を組んで、頷いている。

「うどんと戦ったの？」僕は聞き返した。僕の住んでいる街は、うどん屋さんが多い。うどんでは有名な街だ。僕は週に一回程度しか、うどんは食べないけれど、パパは、毎日、昼ごはんにうどんを食べているらしい。それにも関わらず、休みの日の昼食も、家族でうどん店に行く。

「そうじゃ。お前が週に一回は食べるうどんだ。うどんは意外に消化するのが大変なんだ。特に、この街の人間は、うどんはあまり噛まずに、そのまま飲み込むから、長いままだ。それに、この街のうどんは、手でこねたり、足で踏んだりするから、腰が強いので、消化も時間がかかるんだ。特に、太い麺はな」

そう言われれば、そうなのかもしれない。でも、大王に言われるまで、そんなことに意識をしたことはなかった。パパは少し固めで、なおかつ、太めの麺が好きだ。だからそうした店に行く。必然的に、僕もそうしたうどんが好きになる。

「ある時の昼食時だったかなあ。喉からうどんが流れてきた。わしは部下たちに、消化活動を命令した。部下たちは、スコップやノコギリ、ツルハシ、包丁などを持って、いつものようにうどんを切り刻もうとした。すると、うどんが突然に頭を持ちあげた。うどん竜だった」

「うどん竜？うどんが竜になるの？」僕は信じられず、疑いのまなざしを大王に向けた。でも、大王はそんなことに気にせずにはしゃべり続ける。

「そうじゃ。うどん竜じゃ。まあ、出現するのは、何万本のうちの一本の確率じゃがな。麺の腰が強くて固く、そして、あまり噛まれずに飲み込まれると、そのうちの一本の麺が変化して、うどん竜になるんじゃ。なぜ、うどん竜になるのか、わしにもわからん。とにかく、そのうどん竜が頭を持ち上げ、上から視線で、わしらを睨みつける。このままでは消化はできない。だから、わしは部下に一斉に飛び掛かるように命令した。アイアイサーの返事とともに、部下がうどん竜に飛び掛かるが、うどん竜の皮膚が滑ると、うどん竜が長い体をくねくねさせるので、部下たちはうどん竜の体を掴まえるどころか、反対に跳ねとばされる始末だ。

そこで、わしの出番じゃ。わしは部下たちの前に出て、うどん竜と対峙した。鎌首を持ちあげて、顔から舌をしゅるしゅると出し、わしを威嚇するうどん竜。お互い、一步も引かない。だが、一步も進めない。互いに睨み合ったままだ。緊張感が走る。うどん竜が長い舌を口に戻した瞬間、一瞬の隙が出来た。わしは猛然とダッシュした。うどん竜をはがいじめにするためだ。だが、うどん竜はひらりと体をかわす。さすがに、うどん竜もわしに掴まれるのを恐れたみたいだ。

だが、ここであきらめるわけにはいかない。再度、身をおかわした方に、わしは飛び掛かる。うどん竜が逃げる。その繰り返しが続いた。さすがのわしも息が切れ出した。うどん竜も疲れた様子だ。

すると、頭の上から、さらにうどんが流れてきた。それも二本。その二本のうどんもうどん竜に変化した。そして、そのうどん竜がなんと合体したのだ。頭が三つ、体が一つのキングうどん竜だ。これぞ伝説のうどん竜だ。わしもこれまでめったに遭遇したことはない。さすがのわしも

、うどん竜三匹が一体化したキングうどん竜とは一人では戦えない。ここは、一旦、退却し作戦を建て直そうとする。だが、その猶予もなく、キングうどん竜の三つの頭がわしに襲って来た。一匹が正面から、もう一匹が右の方向から、もう一匹は左の方向からだ。逃げ場はない。絶体絶命だ。わしはうどん竜に体を巻かれて、宙に浮いた。

大王。大王。部下たちがわしを呼ぶものの、なすすべがない。うどん竜の体がわしを締め付けてくる。痛い。体が折れそうだ。ちぎれそうだ。その時だ。頭の上から、大量の水、いやうどんの出汁が津波のように流れてきた。天はわしを見離なさなかった」

そうだ。僕は、うどんの麺を食べた後、出汁を全部、飲んでしまう癖がある。ママからは、塩分の取り過ぎになるから、やめなさいといつも注意されるけれど、やめられない。だって美味しいんだから。

「わしやキングうどん竜はうどんの出汁の津波に飲み込まれた。その津波の勢いで、キングうどん竜のわしの体を締め付ける力が弱まった。今が、チャンスだ。わしは全身の力を振り絞って、キングうどん竜からのがれた。キングうどん竜は、出汁の津波に押し流されて、壁に体をぶつけると動かなくなった。

今だ。わしは伝家の宝刀「うどん薙ぎの剣」を抜き、キングうどんに斬りかかると、首を三本、刎ね飛ばした。首と胴体が切り離されたうどん竜が横たわる。まずは、胴体を始末しろ。と叫んだ。胴体さえなくなれば、合体することができないからだ。わしの掛け声に、出汁の津波から逃れていた部下たちも、包丁やノコギリなど、思い思いの道具を手にとると、キングうどん竜の胴体に飛び掛かった。そして、胴体をねぎのように切り刻み、消化の穴に放り込んだ。

「くそ。今回は」

「油断したが、次は」

「必ず、お前たちを倒すからな」

キングうどん竜の頭は、体から切り離されたにも関わらず、最後の雄叫びをあげた。わしは、両手を合わせ、食べ物に感謝の意を表しながら、竜の首を切り刻むと、消化の穴に放り込んだ。こうして、キングうどん竜との壮絶な戦いは終わった」大王は満足そうに語り終えた。

「まあ、そういうことだから、うどんに関わらず、何でも、よく噛んでから飲み込んでくれよ」といやに軽く言う。

キングうどん竜の話は本当だろうか。僕のお腹の中で、うどんが竜になるなんて、信じられない。それも、三本が一体となって、キングうどん竜だなんて。まるで、マンガや映画の世界だ。でも、お腹が空いて、うどんをつい三玉食べた時は、お腹が張って痛い時がある。それは、うどん竜がキングうどん竜に変身して、僕のお腹の中で暴れているのだろうか。僕は週一回ぐらいしかうどんは食べないけれど、パパは毎日、うどんを食べている。すると、パパのお腹の中では、毎日、うどん竜やキングうどん竜とパパのうんこ大王たちが戦っているのだろうか。パパのお腹がいつも突き出ているのは、その戦いのせいなのだろうか。パパのお腹がうどん竜によって突き破られないか心配だ。それよりも自分のお腹だ。僕は自分のお腹を見る。今は、朝ごはんを食べていないので引っこんでいる。安心した。でも、今の話は本当だろうか。僕は首をかしげるけれど、大王の自信溢れる顔を見ると、信用せざるを得ない。

「わかったよ。これからは、よく嚙んでから飲み込むよ。パパにもそう伝えておくよ」

「ああ、そうしてくれ。それが一番だ」大王は気分よく頷いた。

「それと、おなら姉妹のことは話をしたっけ？」大王はなおも話が足りないみたいだ。

「おなら姉妹？」僕のお腹の中には、竜のほかに、おなら姉妹もいるのか。そんなにいろんな者、物？がいても大丈夫なんだろうか。僕は自分のお腹をもう一度見つめ直した。